

青べか物語 季節のない街

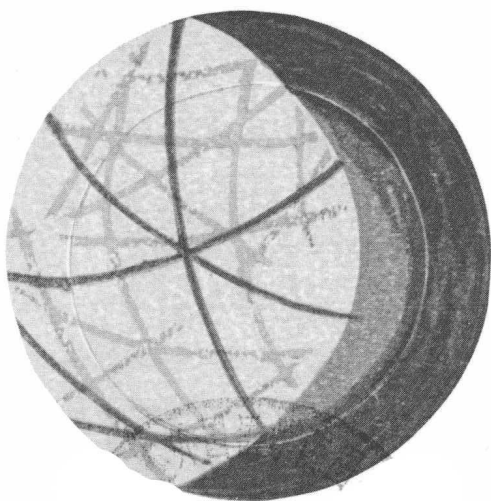
山本周五郎全集

新潮社版

青べか物語
季節のない街

山本周五郎全集

第十四卷



© Kin Shimizu
Printed in Japan 1981



外箱図・「裂織丹前」部分
本扉絵・乾山「絵替土器皿」より

山本周五郎全集第十四巻 定価一六〇〇円

あお ものがたり きせつ まち
青べか物語・季節のない街

昭和五十六年十一月二十五日 発行
昭和五十七年 三月三十日 二刷

著者 山本周五郎
やま もとしゅうごろう

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
業務部 (03) 二六六―五一一 編集部 (03)
二六六―五四一一 振替 東京四―八〇八

印刷所 錦明印刷株式会社
製本所 大日製本株式会社

乱丁・落丁本は小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

青べか物語

五

季節のない街

一五九

附記

三五六

青べか物語・季節のない街

青
べ
か
物
語

「青べか物語」目次

はじめに	七
「青べか」を買った話	八
蜜柑の木	一四
水汲みばか	二〇
青べか馴らし	二五
砂と柘榴	三三
人はなんによって生くるか	三七
繁あね	四一
土堤の春	四七
土堤の夏	五三
土堤の秋	五九
土堤の冬	六五
白い人たち	七三
ごったくや	七九
対話（砂について）	八五
もくしゅう	九一
経済原理	九七

朝日屋騒動	七
貝盗人	一三
狐火	一七
芦の中の一夜	二九
浦柏の宗五郎	六九
おらあ抵抗しなかった	一〇三
長と猛獣映画	一二〇
SASE BAKA	一二三
家鴨（あひる）	一二四
あいびき	一二九
毒をのむと苦しい	一三三
残酷な挿話	一三三
けけち	一三四
留さんと女	一三五
おわりに	一四三
三十年後	一四四

はじめに

浦柏町は根戸川のもっとも下流にある漁師町で、貝と海苔と釣場とで知られていた。町はさして大きくはないが、貝の罐詰工場と、貝殻を焼いて石灰を作る工場と、冬から春にかけて無数にできる海苔干し場と、そして、魚釣りに来る客のための釣舟屋と、ごったくやといわれる小料理屋の多いのが、他の町とは違った性格をみせていた。

町は孤立していた。北は田畑、東は海、西は根戸川、そして南には「沖の百万坪」と呼ばれる広大な荒地がひろがり、その先もまた海になっていた。交通は乗合バスと蒸気船とあるが、多くは蒸気船を利用し、「通船」と呼ばれる二つの船会社が運航していて、片方の船は船艀を白く塗り、片方は青く塗ってあった。これらの発着するところを「蒸気河岸」と呼び、隣りあっている両棧橋の前にそれぞれの切符売り場があった。

西の根戸川と東の海を通じる掘割が、この町を貫流して

いた。蒸気河岸とこの堀に沿って、釣舟屋が並び、洋食屋、ごったくや、地方銀行の出張所、三等郵便局、巡査駐在所、消防署——と云っても旧式な手押しポンプのはいつている車庫だけであつたが、——そして町役場などがあり、その裏には貧しい漁夫や、貝を採るための長い柄の付いた竹籠を作る者や、その日によって雇われ先の変る、つまり舟を漕ぐことも知らず、力仕事のほかに能のない人たちの長屋、土地の言葉で云うと「ぶつくれ小屋」なるものが、ごちゃごちゃと詰めあつていた。

町の中心部は「堀南」と呼ばれ、「四丁目」といわれる洋食屋や、「浦柏亭」という寄席や、諸雜貨洋品店、理髪店、銭湯、「山口屋」という本当の意味の料理屋——これらはもっぱら町の旦那方用であるが、そのほか他の田舎町によくみられる旅籠宿や小商いの店などが軒を列ねていた。その南側の裏に、やはり「ごったくや」の一面があり、たった一軒の芝居小屋と、ときたま仮設劇場のかかる空地がある、というぐあいであつた。

これらのことをどんなに詳しく記したところで、浦柏町の全貌を尽すわけにはいかない。私も決してそんなつもりはないので、ただこの小さな物語の篇中に出てくる人たちや、出来事の背景になっているものだけを、いちおう予備知識として紹介したにすぎないのである。

はじめに「沖の百万坪」と呼ばれる空地が、この町の南

側にひろがっていると書いた。私は目測する能力がないので、正確にはなんともいえないが、そこは儘かにその名にふさわしい広さをもっていた。畑といくらかの田もあるが、大部分は芦や雑草の繁った荒地と、沼や池や湿地などで占められ、そのあいだを根戸川から引いた用水堀が、「一つ汎」から「四つ汎」まで、荒地に縦横の水路を通じていた。——この水路や沼や池には、鮎、鯉、鮪、鯰などがよく繁殖するため、陸釣りを好む人たちの取って置き場の場所のようであった。また、沼や池や芦の茂みの中には、鰻とか鮠などが棲んでいて、よく人をおどろかしたり、なにごとでもすぐに信ずるような、昔ふうの住民を「隙さえあれば化かそうと思っている」ということであつた。

この町ではときたま、太陽が二つ、東と西の地平線上にあらわれることがある。そういうときはすぐにそつぽを向かなければ危ない。おかしいことがあるものだ、などと云つて二つの太陽を見ると「うみどんぼ野郎」になつてしまふ。そうしてそのときにはすぐ脇のほうで、鰻か鮠の笑っている声が聞えるということである。特に鰻はたちの悪いいたずら好きで、人が道を歩いていると、ひよいと向うへとびだして来て、立ちあがつて、交通整理でもするように右手をあげて右をさし示したり、左手で左のほうをさしたりする。そうしたら必ず反対のほうにゆかなければならぬ。うっかりしてそちらへゆけば、きまつて池か堀か、わ

るくすると根戸川へ落ちこんでしまふ、といわれていた。百万坪から眺めると、浦柏町がどんなに小さく心ぼそげであるか、ということがよくわかる。それは荒れた平野の一部にひらべったく密集した、一とかたまりの、廃滅しかかっている部落といった感じで、貝の罐詰工場の煙突からたち昇る煙と、石灰工場の建物ぜんたいを包んで、絶えず舞いあがつている雪白の煙のほかには、動くものも見えず物音も聞えず、そこに人が生活しているとは信じがたいように思えるくらいであつた。

私はその町の人たちから「蒸気河岸の先生」と呼ばれ、あしかけ三年あまり独りで住んでいた。

「青べか」を買つた話

芳爺さんに初めて会つたのは「東」の海水小屋であつた。冬のこと、海水小屋は取り払われ、半分朽ちた葭簾の屋根と、板を打ちつけた腰掛が一部だけ残っていた。町を西から東へ貫流する掘割が、東の海へ出る川口のところ、土地の人たちはそのあたり一帯を漠然と「東」と呼んでいた。

私は海を眺めていた。腰掛は釘がゆるんでいるので、足を突っ張つてうまく支えていないと、すぐさま潰れてしま

いそうであつた。干潮で、遠浅の海は醜い底肌を曝し、堀の水は細く、土色に濁つていた。急に腰掛がぐらつと揺れたので、私は吃驚して、突つ張つてゐる足に力を入れながら振り返つた。すると一人の老人が、すぐうしろに腰を掛けて、私などは眼にもはいらないといったような顔つきで、古風な食入を腰から抜くところであつた。私は支える足に氣をくばりながら、また海のほうへ眼を戻した。

「ずつとめえに、ここへなにかぶつ建てようと思つたつけどが」と老人が大きな声で云つた、百メートルも先にいる人に話しかけるような声であつた、「なんかぶつ建てくれべえと思つたつけどがねえよ」

私は黙つていた。私は老人しか見なかつたが、それではもう一人伴れでもいるのか、と思つたのである。しかし答える声はなく、老人はやかましい音をさせて煙管をはたき、次のタバコを吸いつけた。煙管はつまつていて、喘息患者の喉のように、ぐずぐずとやにの鳴る音が聞えた。

「ずつとめえのこつた、おつゆのおつかあがまだ綿屋へ嫁にいかねえころのこつた」と老人は大きな声で云つた、そしてやや暫く黙つていてから、また煙管をはたき、三服めを吸いつけて、喚きたてた、「なんにもおつ建たなかつただよ」

私はやはり黙つていた。

二度めには百万坪で会つた。季節は春で、強い風が吹い

ていた。私は「二つ込」の堀に沿つた道を、沖の弁天社のほうへ歩いてゐた。なんのふぜいもない、だつた広いだけのその荒地のほぼ中ほどに、無人の、小さな、毀れかつたような古い社が、ひねこびた六七本の松に囲まれて建っている。いつのころかたいへん流行つた弁天で、特に各地の花柳界の女性たちが参詣に列を作つたそうである。どういふ靈驗があつたのか土地の者は知らない、ただひとつばかり流行り、夥しい参詣者の絶えなかつたことと、當時その境内が別世界のように賑わつたということだけは、子供たちでさえよく知つてゐた。

潮の匂いのする強い風に吹かれながら、沖の弁天のほうへ歩いてゐたとき、うしろからいきなり大きな声で呼びかけられ、私はとびあがりそうに驚いて振り返つた。あの老人がすぐうしろにいた。継ぎはぎだらけの、洗ひ晒しためくら縞の半纏に、綿入の股引をはき、鼠色になつた手拭で頬かぶりをしている。それはこの土地の漁師たちに共通の常着であるが、もう綿入の股引をはく季節ではなかつた。「おめえ舟買わねえか」と老人は私と並んで歩きながら喚いた、「タバコを忘れて来ちまつただが、おめえさん持つてねえだかい」

私はタバコを渡し、マッチを渡した。老人はタバコを一本抜いて口に咥え、風をよけながら巧みに火をつけると、タバコとマッチの箱をふところへしまつた。

「いい舟があんだが」と老人は二百メートルも向うにあるひねこびた松ノ木にでも話しかけるような、大きな声でどなりたてた、「いい舟で値段も安いもんだが、買わねえかね」

私が答えると、老人は初めからその答えを予期していたように、なんの反応もあらわさず、吸っていたタバコを地面でもみ消し、残りを耳に挟んでから、手湊をかんだ。

「おめえ」暫く歩いたのち、老人がひとみな声で云った、「この浦泊へなによりしに來ただい」

私は考えてから答えた。

「ふうん」と老人は首を振り、ついで例の高ごえで喚いた、「おんだらにやあよくわかんねえだが、職はあるだかい」

私が答えると、老人はちよつと考えた。

「つまり失業者だな」と老人は喚いた、「嫁を貰う気はねえだかい」

私は黙っていた。別れるときマツチだけ返してもらったが、急に耳の遠くなった老人は、二度も三度も私の云うことを訊き返し、そのため私は自分がひどい吝嗇漢になったような、恥ずかしさを感じた。

三度めは根戸川亭で会った。それは蒸気河岸にある洋食屋で、土間が食堂、奥に座敷があつて、夜になると蒸気船（通船といわれていた）の船員や漁師たちが、しばしば盛大に酔って騒いだ。或る日の午ごろ、私が食堂のがたがた

する椅子に掛け、一本のビールでカツ・ライスを喰べていると、老人が私の卓子へ来て差向いの椅子に掛けた。

いまでもそうであるが、外で食事をするときには、私はなにか読みながらでないとおちつけない癖がある。そのときも私は青巻という本を読んでいて、老人がそこへ腰掛けたものだから、いつそう熱心に読むふりをし、そうして本から少しも眼を放さないまま、トンカツを噛んだりビールを喰ったりしていた。

女が座敷のところへ来て、「芳さんなんにするだえ」と呼びかけた。

「うう」と老人が答えた、「おつかあがいねえからめし食うべえと思つて來ただが、うう、なんにすべえか考げえてるだ」

「うちじゃあ考げえるほどごたいそうなのは出来ねえよ」

すると老人が私を見ながら、——そこへ腰掛けたときからずっと、老人が私をみつめ続けていることを私は知っていた、——で、老人は私の顔を見ながら、例のずばぬけた高ごえで喚きたてた。

「ビールをコップに一杯くんねえかね」

「ビールを一杯だつて」と女が云った、「おらそんなこと聞いたこともねえ、酌のまちげえじゃねえのかえ」

東京へゆけばビールの一杯売りをやっている、と老人が

云った。それはビヤホールというものだ、と女が云った。いや、トンカツやカレーライスが出来るから洋食屋と違ひはない、と老人が云った。一杯売りをするのは生ビールといって、樽で来るから一杯ずつでも売れるが、壘詰はあけてしまえばあとがなんのんさまだから一杯だけ売るわけにはいかないのだ、と女が云った。あとがなんのんさまになつてもしょうばいは損して得取れということがある、と老人が喚きたてた。

私は縛りあげられ、罫にはまつたことを知った。まだ三分の一ほど残っているビール壘を、老人のほうへ置き直しながら、私は云わなければならぬことを云った。

「そうかね」と云うより早く老人は女に向つて喚きたてた、「コップ」

それから私を見て「タバコの持合せはねえかね」

私が答えると、老人は「なに、いま欲しかねえだよ」と云った。

釣舟宿の「千本」の三男の長から、私は老人のことを聞いた。その土地の出来事について、籠屋のおたまと「千本」の長とが、つねにぬかりなく情報を呉れるのである。おたまも長も小学校の三年生であった。——老人の名は芳夫婦つきりで、三本松の裏に住み、「大蝶」の倉庫番をしている、ということであった。「大蝶」はその町でいちばん大きく貝の罐詰工場を経営してい、漁師たちの採る貝を

沖で買い取るために、大蝶丸という船を持っていた。私の問いに答えて、長はつよく首を振った。

「ううん、そんなことねえだよ」と長は云った、「工場はやかましかんべ、だからみんなえつけえ声になつちまうだ」

えつけえとはもちろん大きなという意味である。長はお「芳爺さまはそら耳を使う」と云ったが、それはもう私の知っていることであつた。

それからのちもときどき道で会つたが、老人は挨拶もしないし、私を見ても棒枕か石ころでも見るような眼つきしかしなかつた。頬かぶりをとつた老人の顔は、瘦せていて小さく、太陽と潮風にやけた頭は禿げていて、灰色の髪の毛がほんの少し後頭部にあり、頬や顎にはまばらな無精髭が、古くなつたブラシのように、一本ずつ数えられるほどまばらに、きらきらと銀色に光っていた。眼には非人間的な鈍い冷たい光があり、殆んど唇が無いようにみえる薄い唇には、いつも人を小ばかにしたような、狡猾な微笑が刻みつけられていた。

尤もこれは芳爺さんに限らず、その土地の一部の人たちに共通した顔だちであつた。かれらは季節ごとに来る遊覧客、——魚釣り、汐干狩り、海水浴など、遊びに来る都会の客たちから「うまくせしめる」習慣がついているので、その冷たく鈍い眼や、狡猾そうな口つきの裏には、いつで

も朴訥な表情をつくり、あいそ笑いをする用意ができていたのであった。——四月の末か五月のはじめころ、たぶん五月のはじめころであつたらう、私は三本松のところで老人に掘まつた。

三本松といつても、樹齡の古い松ノ木が一本しかない。

ずっと昔は三本あつたそうであるが、私の聞いた限りでは、それを自分の眼で見たという者はなかつた。——堀の岸に横這いのかたちで枝を伸ばしている。その松ノ木の脇に、水から揚げて久しいべ、か舟が伏せてあつた。ずいぶんまえからそこにあり、私は通りかかるたびにそれを見た。べ、か舟というのは一人乗りの平底舟で、多く貝や海苔採りに使われ、笹の葉のような軽快なかたちをしてい、小さいながら中央に帆桁もあつて、小さな三角帆を張ることができたしかし、そこに伏せてあつたのは胴がふくれていてかたちが悪く、外側が青いペンキで塗つてあり、見るからに鈍重で不恰好だつた。

「あのぶつくれ舟か」と長が或るとき鼻柱へ皺をよらせ、さも輕蔑に耐えないというように云つた、「青べ、かつてえだよ」

この誇り高い小学三年生は、見る気にもなれないという顔つきでそつぽを向いた。

それは碇かにぶつくれ舟であつた。伏せてある平底の板は乾いてはしやぎ、一とところあいている穴から、去年の

枯れ草がひよろひよると伸びていた。水から揚げられた古い舟ほど、衰れに頼りなげなものはない。それは老衰して役に立たなくなつた馬が、飼主にも忘れられ、厩の裏でひとりしよんぼり首を垂れているような感じにみえる。——

その日も私は道傍に佇んで、人間も同じようなものだ、などというのは俗すぎるな、というようなことを思いながら、暫くタバコをふかしていた。

そこへ老人が来て話しかけた。私は気づかなかつたが、老人は私のようなすを見ていたらしい。おそらく、私がその舟にすっかり惚れこんだものと思つたのであろう、にこやかな、とりいのような笑顔をつくり、「この舟を買わねえかね」とあいそいい声で喚いた。

私は答えることができなかった。

「先生はこの土地のことを詳しく見てゑつて云つてたんべが」と老人が喚いた、「そんなら岡の上へえ歩きまわつてもしょあんめえじや、根戸川のまわりだの百万坪の込だの、堀もそうだし、沖へも出てみるがいいだ、それにはこの舟さえあれば用が足りるだよ」

まあ見てくれと云つて、老人は伏せてある青べ、かをひき起こした。それは極めてすばやく、声をかける隙もない動作だつた。

「ほれ見せえま」と老人は云つた、「まつさらとは云えねえが、造つてからまだ七年にしかなんねえ、大事にしるば

まだ十五年や二十年はたっぷり使えるだ」

私は自分の考えを述べようとした。

「値段もまけるだよ」と、老人は喚きたてた、「蒸気河岸の先生のこつたからよ、思いきつて五までまけるだ、たった五だ」

私が答えると、老人は片手を出した。

「タバコ」と老人は云った。

私はタバコとマッチを渡した。

「じゃあ、なんだ」と老人はタバコを一本抜いて火をつけ、タバコの箱はふところへ入れ、マッチだけを返ししながら喚いた、「先生のこつたから思いきつて四にすべえ、四だ」

私が答えると、老人はタバコを地面でもみ消し、残りを耳にはさみながら喚きたてた。私は長の顔や、軽蔑しきつた口ぶりを思いだしたが、同時に、自分が老人に縛りあげられ、ぬけ出すことのできない罫にかかったことを悟った。「見せえま」と老人は喚き続けた、「揚げつ放しにしといたからちつとばかはしゃいであるだが、まだこんなにしつかりしてるだ」

老人は舟べりや舳先を、大事そうに撫でたり叩いたりした。私はそれを眺めながら、老人が舟をひき起こすときのすばやい動作には二つの意図があった、ということに気づいていた。一つは私を捉えること、他の一つは去年の枯れ草が覗いていた舟底の穴を私から隠そうとしたのだ、ということ

とである。——もう一つ、これを書いては人が信じなくなるだろうと思つて、書かないことにするつもりであるが、老人が舳先を撫んでゆすぶったとき、舳先の尖ったところが折れてしまった。すると老人は自分の手にある折れた舳先の、折れたところへ唾をつけて、元の部分と合わせ、そこを片手で押えたまま、いつそう高ごえになつて喚きたてたのであった。事実はこのとおりだったのだが、これを文字にすると、おそらく人は筆者が調子づいてふざけていると思ふにちがいない。「事実を書く」ということがいかに困難なしごとであるかは、こんな些細な点でも思い知らされるのである。

「よし、そんなら三と五十にすべえ」と老人は云った、「これ以上は鑑一文負からねえだ、三と五十、これで話ばかりきまつただ」

私はちよつと質問した。

「そんなこたあ尻でもねえさ」と老人は云った、「い、か、ず、ちの船大工に頼めばすぐ繕ってくれるだ、いいとも、おらが持つてつて頼んでやるだよ」

「それから」と老人はいそいで付け加えた、「こういう売り買いには、買い手のほうでなにか物を付けるのがしきたりになつてゐるだ、豚肉の百匁でもいいし、夏なら西瓜の三つくれえかな、うう、おめえよく舶来のタバコを吸つてるようだが」

私は豚肉を届けると答えた。

こうして私は「青べか」の持ち主になった。どんなに小さく、そしてぶつくれ舟であるにもせよ、一ぱいの舟の所有者になったのだが、私はうれしくもなかったし、誇りがましい気持ちにもなれなかった。長をはじめとする少年たちの軽侮の眼や、嘲笑の声を考えるだけで、むしろ急に肩身のせまくなつたような鬱陶しい、沈んだ気分にとらわれたのであった。

「いいさ、あんな舟」と私は帰る道で自分に云つた、「乗らなければいいんだ」

私は明るく日、老人のところへ舟の代金と、豚肉を百匁だけ届け、なお青べかについて、二三のことを頼んだ。老人はこころよく受け合い、そのとおりにすると約束した。

蜜柑の木

助な、あこ（あにといふほどの意味）はお兼に恋をした。

助なあこは大蝶丸の水夫であり、お兼は「大蝶」の罐詰工場へ貝を剥きにかよう雇い女で、亭主があつた。

この土地で恋といへば、沖の百万坪にある海苔漉き小屋へいつて寝ることであつた。そんなてまをかける暇がなければ、裏の空地の枯れ声の中でもいいし、夏なら根戸川の

堤でも、妙見堂の境内でも、消防のポンプ小屋でも用は足りた。実際のところ、海苔漉き小屋まで寝にゆくのは、よほど二人がのぼせあがつているか、ゆきすぎた声を抑えることのできない女との場合、——土地の人たちのあいだで、そういう癖のある五人の女性の名が公然と話題になつていたが、——などで、かれらの意見によれば、「そんなにてま暇をかけるほど珍しいことでもあんめえじゃあ」というのが常識であつた。

助なあこはそうではなかつた。彼は中学生が女学生を恋するように、純粹に、初心に恋していた。大蝶丸で沖へ貝を積みこいていっているあいだ、彼の胸はつねにお兼を想うことで痛み、その眼にはお兼の姿、——工場の古びた建物の前で、大勢の女や老婆たちと並んで、巧みに貝を剥いている姿が、絶えずあらわれたり消えたりするのであつた。

大蝶丸の水夫は三人で、船長の荒木さんはべつに家庭を持つていたが、エンジさんの正山さんと水夫たちは、工場の中にある小屋に住んでいた。助なあこは自分の恋を秘し隠しにし、誰にも気づられないように、最高の抑制を保ち続けていたが、或る夜半、ねごとにお兼の名を呼んだのを隣りに寝ていた二人の水夫に聞かれて、せっかくの努力がむだになつてしまつた。

「ゆんべが初めてじゃねえぞ」と水夫の一人が云つた、「おんたらあ何遍も聞いているだ、なあ」